

端氣遺跡群 I

土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報

昭和 57 年度

前橋市教育委員会

序

近年農地の効率的利用を図るための土地改良事業が大きな規模で進められています。このような開発事業と埋蔵文化財の保存という問題は常にうらはらの関係にあり、前橋市教育委員会においても文化財保護の立場からこの問題に取り組み、両者の調整に努力しております。

前橋市では既に昭和54年度から西大室、富田、清里南部各遺跡群の発掘調査が開始され、翌昭和55年度には清里南部遺跡群が、昭和56年度には富田遺跡群の調査が終了し、西大室遺跡についても今年度終了しました。これに替って端氣遺跡群と小神明遺跡群の発掘調査が今年度から新たに開始され、ここに報告する端氣遺跡群発掘調査は昭和57~61年度の5カ年度にわたって実施される事業であります。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居、中世以降の環濠、石敷遺構等前橋及び地域の歴史を解明していくにあたっての貴重な資料を加える事ができました。ここにその成果の一端を報告します。

最後に、この調査を実施するにあたり、終始ご協力いただいた農政部土地改良課、端氣土地改良区の方々、また直接発掘作業に携わった調査担当者、作業員の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月31日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

例　　言

1. 本書は前橋市土地改良事業実施地区（端気）内の埋蔵文化財発掘調査についての概報である。
2. 調査主体は前橋市教育委員会である。
3. 調査担当者
松村 親樹、前原 照子、岸田 治男、林 喜久夫、町田 信之
4. 所在地
前橋市端気町塙越456他
5. 調査期間及び調査面積
昭和57年5月31日～昭和57年8月10日、 9,700m²
6. 本書の執筆及び編集は主に松村親樹が担当し、遺物整理、図面整理、図版作成、写真撮影等は担当者及び整理作業員が分担した。
7. 発掘調査及び概報作成にあたり下記の方々に多大なる御指導、御協力をいただいた。(敬称略)
新井 房夫、石川 正之助、梅沢 重昭、大江 正行
8. 発掘調査にあたっては地元を中心とした多数の発掘作業員の方々の協力があった。記して感謝の意を表したい。
9. 本調査における出土遺物、実測図、写真等は一括して前橋市教育委員会で保管している。
松村 ふさ、金子 栄一、桃沢喜十郎、塩野 賢吉、佐田 まつ、大沢 好幸、片貝 みよ
細谷ふさ子、大谷 良助、古松英太郎、長岡 武八、佐藤眞寿雄、田中 芳男、深沢 清子
五十嵐くま、中島幸十郎、大谷 次郎、中島 つる、星野 長男、角田もと江、下山 良雄
細谷 貞子、宮石 明彦、須永 貞、小林 初子、町田端八郎、小屋 政雄、鈴木 孝子
柴崎香代子、田代 時子、湯本島三郎、加部 二生、渡辺 美鈴
中東 彰子、金井 君江、佐藤 里恵、松島 隆子、橋本 礼子、橋本 真理、安藤 友美
亀井 弘美、柴崎まさ子、岡田 末子、奥村 敏子、福島 道子、新保 一美、渡木 秋子
星野久美子、白井 栄恵、木部理有子、福島 裕子、青柳 宏枝
(敬称略、順不同)

目 次

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 発掘調査の概要	3
1. 遺構及び遺物	3
2. 発掘調査の経過	4
3. 住居跡	5
4. 周溝墓	12
5. 環濠	15
6. 石敷遺構	16
7. その他の遺構	18
(1) ピット	18
(2) 溝状遺構	18
(3) トレンチ9、20拡張区	19
(4) A-1区(氾濫原低地)	19
(5) 花粉分析報告	20
8. まとめ	26

挿図目次

挿図1 周辺の遺跡分布図	2	挿図12 1号周溝墓出土遺物実測図	13
挿図2 発掘区位置図	2	挿図13 2号周溝墓出土遺物実測図	14
挿図3 A区地層柱状図	3	挿図14 2号周溝墓の遺構実測図	14
挿図4 遺構全体図	折込	挿図15 環濠地層断面実測図	15
挿図5 繩文時代の住居と古墳時代の第1号 住居の遺構実測図	5	挿図16 石敷遺構2及び1号土拡出土遺物実 測図	17
挿図6 繩文時代の住居から出土した遺物実 測図	6	挿図17 石敷遺構2出土常滑実測図	17
挿図7 古墳時代の第1号住居から出土した 遺物実測図	7	挿図18 石敷遺構全体図	折込
挿図8 古墳時代の第2号住居の遺構実測図	9	挿図19 石敷遺構地層断面図及び基線下断面 図(含1号土拡地層断面図)	折込
挿図9 遺物実測図	10	挿図20 ピット33出土遺物実測図	18
挿図10 遺物実測図(続き)	11	挿図21 トレンチ9拡張区出土遺物実測図	19
挿図11 1号周溝墓の遺構実測図	12	挿図22 A-1区地層断面図	19

I 遺跡の位置と環境

赤城山南麓の長く伸びる裾野は多くの河川の開拓により舌状台地が多数形成されており、端氷遺跡群も裾野部最末端の、足下を古利根川により削り取られている台地上に所在する。正にここから南に関東平野が広がっている。本遺跡地は端氷町の中央を小坂子に向って北上する道路から西に約100mに南流する通称「西川」と、更に西に200m~250m程の所を南流する小河川とに狭まれた標高約105m~117mの先端を東に向ける舌状台地上に位置しており、古利根川による段崖が比高差5~6mで北西から南東にかけて伸び、この段崖下を県道今井・前橋線が通っている。本遺跡地舌状台地先端部分の丘陵の最も高い所からこの県道まで比高約8m、低い所からでも約2mある。

本遺跡地付近の遺跡環境は、昭和48年から55年にかけて8年間の長きに渡って発掘調査された芳賀北部団地遺跡（現在の高花台団地、昭和48年~50年）、芳賀西部工業団地遺跡（昭和50年）、芳賀東部工業団地遺跡（昭和51年~55年）がそれぞれ本遺跡地より北北東に約2km、0.4km、北東に約1.5kmに在り、面的に広がりを持つ遺跡の調査だけにこの地区のみに留らず集落の在り方などを考える上で貴重な資料として整理の結果が期待されている。その概要を述べれば、生活の痕跡は既に縄文時代前期からあり、弥生時代の構造が未確認などを除けば古墳時代から奈良・平安時代を経て、戦国、江戸時代に至るまで継々と続いている。特に本遺跡地との関連では西川を挟んで上流東側の芳賀西部工業団地遺跡に31基もの古墳が集中して検出されており、今回の調査で周溝覆土にC軽石純層を含む方形周溝墓が確認された事と考え合わせると弥生時代から古墳時代にかけてのこのあたりの土地利用について貴重な資料が提出された。他に芳賀東部工業団地遺跡から東へ0.5kmに桧峯遺跡（昭和56年）があり、竪穴住居から奈良三彩小壺が出土し、注目を集めた。古墳については昭和10年の調査で芳賀地区は64基（端氷町は4基）が確認されているが、現在ではオブ塚古墳が旧状を止め、大日塚古墳がそれと判る程度に残っているだけでそのほとんどが平夷されている。

遺跡名	内 容
芳賀北部団地遺跡	縄文時代竪穴住居3（前期）24（中期） 積石住居4（中期） 配石17 古墳1 奈良・平安時代竪穴住居231 竪立柱建物跡6 製鉄址9 井戸4 溝14 戦国 期城跡1
芳賀西部工業団地遺跡	縄文時代竪穴住居7（前期） ピット6 配石3 弥生時代ピット1 古墳31 埴輪棺直葬墓1 方形ピット1 溝4 中・近世井戸6
芳賀東部工業団地遺跡	縄文時代竪穴住居39（前期）+13 積石住居6（後期） ピット103 古墳4 古 墳時代竪穴住居75(+α) 竪立柱建物跡1 奈良・平安竪穴住居420(-α) 竪 立柱建物跡194 ピット117 製鉄址5 溝72 中・近世井戸9 ピット185 拡86 城跡1
桧峯遺跡	古墳時代竪穴住居11（後期） 奈良・平安時代竪穴住居61 竪立柱建物跡1 ピッ ト2 溝1 竪穴住居4（時期不明） 真間期竪穴住居跡西壁下より奈良三彩小 壺が出土。
オブ塚古墳	前方後円墳、現状で全長約35m。石室は後円部に南南西に開口した自然石乱石積 袖無型の横穴式石室。昭和26年の調査の結果、埴輪に円筒埴輪列と形象埴輪列 が確認され、石空からは人骨、直刀(3振)、刀子、鍼織、耳環、須恵器等出土。 構築は6世紀後半か。
大日塚古墳	円墳、現状ではわずかに盛土を残すのみ。明治の発掘で鏡、刀身等出土。横穴式 石室か。7世紀前半か。



挿図 1

周辺の遺跡分布図

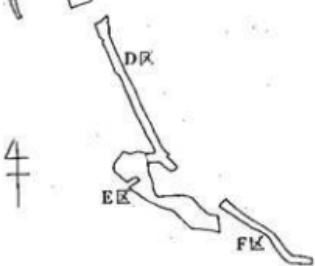
挿図 1 の説明

(1 : 25,000)

- 1 芳賀北部団地遺跡
- 2 芳賀東部工業団地遺跡
- 3 芳賀西部工業団地遺跡
- 4 桧峯遺跡
- 5 オブ塚古墳
- 6 大日塚古墳
- 7 善勝寺
- 8 小神明遺跡群
- 9 端氣遺跡群
- 10 古利根川左岸



挿図 2
発掘区位置図



II 発掘調査の概要

調査区域は道水路施工部分とやむを得ずカットする丘陵部分及び確認された遺構で事情の許す限り拡張した部分の合計9,700m²で、北から順にA、A-1、B、C、D、E、F区とした。A区は本遺跡地所在の舌状台地上を横断する道水路部分で、南下する小河川により浸食を受けて形成された段丘下の湿地部分をA-1区とした。B区は県道今井、前橋線から北へ登る現道を更に北に伸ばす道水路部分。C区は本遺跡地を北西から南東に縦断して、端氣町の中央を小坂子に向って北上する現道に交わる道水路部分及びカットされる段丘部分で、この道水路部分を東西に伸びる農道で区切り以南をD区とした。更に大きくな東へ折れるあたりから現道に交わるまでをE区。舌状台地の先端部分にあたる丘陵をF区とした。

A区では東西約85mを隔てて環濠の東辺、西辺が検出され、この環濠内側中央よりやや東寄りに旧河床と思われる窪みがある他は耕作土20~50cmの下は直に水性堆積の灰褐色ローム層となっていた。他に段丘上に覆土にC軽石純層を含む方形周溝墓2基を検出。B区では河原石で方形に区画した石敷遺構を全体で2、一部分のもので1検出し、環濠南辺西側立ち上りも本区南端でとられることが出来た。C区段丘は2段で中程平坦部に縄文時代住居1軒とピット2、古墳時代住居1軒が重複して検出された。D区では古墳時代住居1軒とこれとは同時期の遺物を集中して出土したトレンチ2つを拡張した。E区は当初古墳と思われた丘陵先端部にトレンチを入れたが、自然丘陵であった。F区は旧河床があっただけで遺構は確認されなかった。

1 遺構及び遺物

イ. 遺構数

竪穴住居跡3軒（縄文前期1軒、古墳前期1軒、古墳後期1軒）、縄文ピット1
方形周溝墓2基、環濠1、石敷遺構3、墓括1、土括1、溝状遺構8条、ピット6

ロ. 遺物量

縄文時代住居跡にかかるもの 土器、石器、パン箱1

古墳時代にかかるもの 土器（土師甕、小型甕、壺、瓶、高杯）、パン箱10

石敷遺構にかかるもの（土括を含む） 土器（涙美甕・當滑甕）、銅製品、釘、開元通宝1枚、天禧通宝1枚、熙寧元宝1枚、古錢（不明）1枚、パン箱2

方形周溝墓、ピットにかかるもの 土器（縄文、土師甕、涙美甕）、石器、パン箱1

トレンチ拡張区にかかるもの 土器（土師甕、小型甕、壺、器台）、パン箱1

表面採集にかかるもの 土器（縄文）、石器、開元通宝1枚、元豐通宝1枚、古錢（不明）2枚、パン箱2

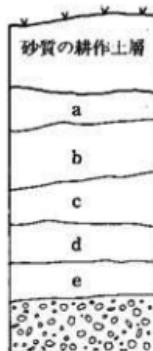


図3 A区地層柱状図

- a層 黒色土層（多量のC軽石と若干のローム混、FPを含む）
- b層 黒褐色土層（ほとんど浮石を含まない）
- c層 砂質土層（ほとんど浮石を含まないで黒くしまっている）
- d層 黑色土層（固くしまっている）
- e層 茶褐色土層（やや浮石をおびている）

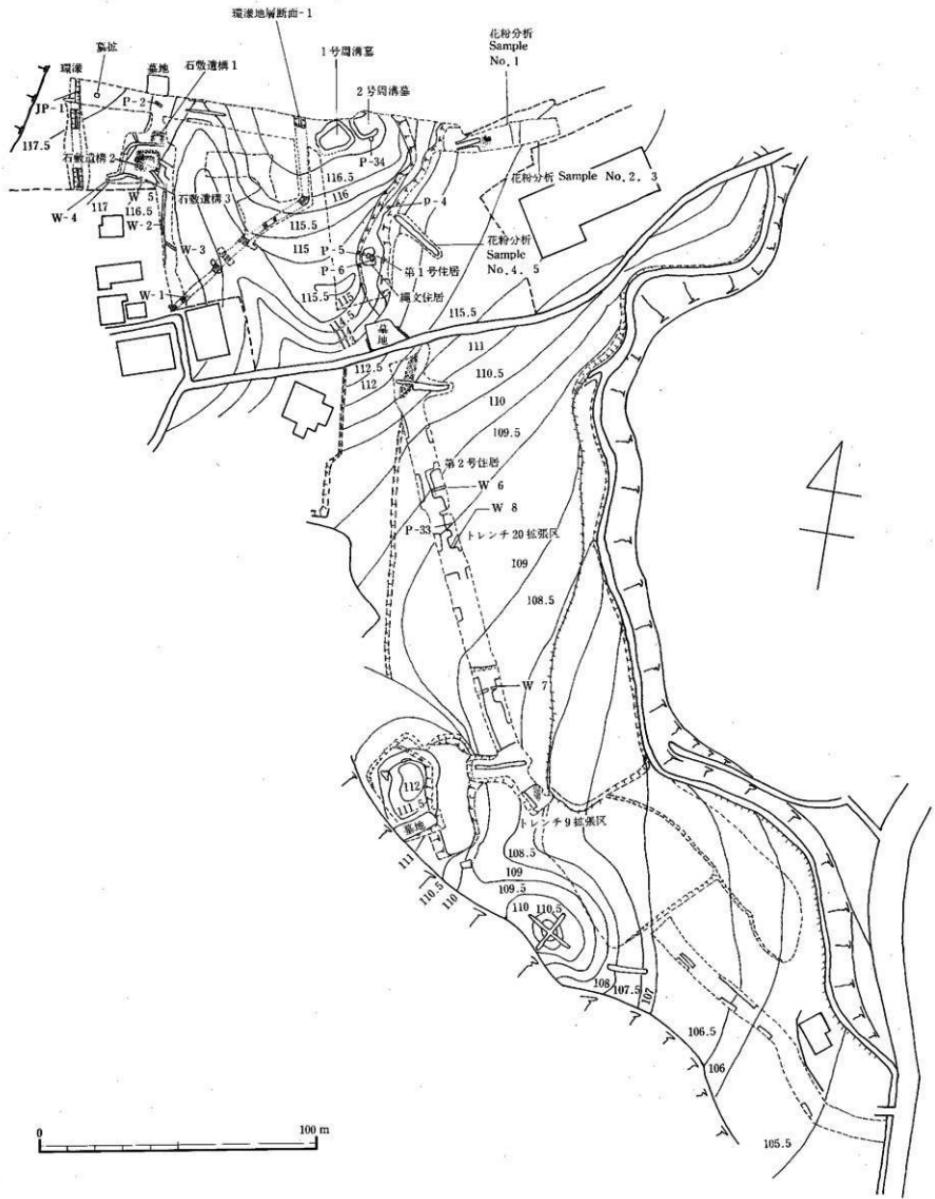


图 4 造模全体图

2. 発掘調査の経過

昭和57年5月31日 端気町公民館を発掘調査事務所とする。器材置場のプレハブ建設。器材等搬入。

- 6月1日 A区表土排土開始。
6月2日 B区表土排土開始。
 環濠調査開始。
6月5日 C区表土排土開始。
 A区第1号周溝墓調査開始。
6月7日 B区石敷遺構調査開始。
6月8日 E区表土排土開始。
6月10日 A区第2号周溝墓調査開始。
6月11日 A-1区調査開始。
6月15日 F区表土排土開始。B区石敷遺構平面実測開始。
6月16日 D、F区トレンチ設定、掘削。
6月17日 新井房夫群大教授地質調査
6月21日 D区トレンチ掘削完了。バックフォーによる作業完了。
6月22日 A-1区B軽石層排土終了。
6月23日 環濠埋土排土終了。A-1区冠水のため排水側溝を設定。
6月29日 環濠内側の遺構確認精査。
7月1日 石敷遺構平面実測終了。
7月5日 C区第1号住居、繩文第1号住居遺物写真。遺物、遺構平面実測
7月8日 D区第2号住居調査開始。
7月9日 花粉分析のサンプル採取。
7月13日 第2号住居遺物、遺構平面実測。
7月14日 A、C区掃除。第2号住居終了。
7月16日 石川正之助氏視察。
7月22日 F区掃除、全体写真。
7月23日 A、C区全体写真。
7月24日 D、E区掃除、全体写真。
7月27日 D区第9トレンチ括張区遺物平面実測。遺物写真。遺物取り上げ。
7月29日 B区ピット群平面実測。B区掃除、全体写真。第1、2号周溝墓終了。
7月30日 A-1区遺構平面実測。石敷遺構全体写真。
7月31日 遺物洗浄、番号付、復元。図面整理。残務整理等。
 {
8月10日 器材等搬出。



作業風景



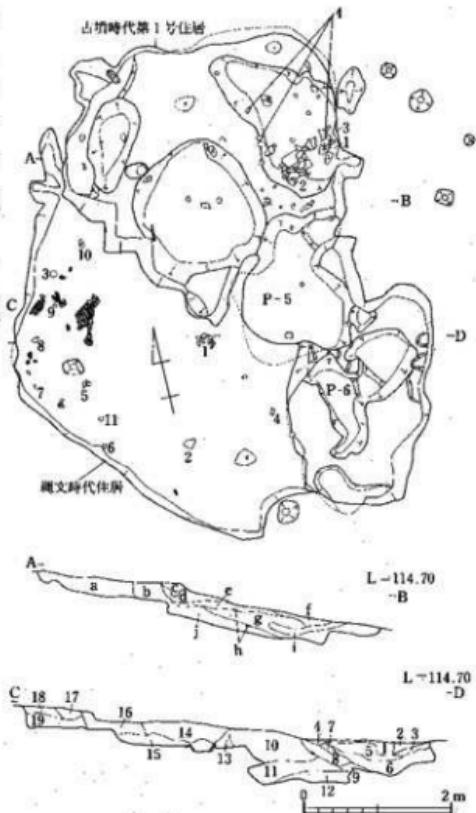
作業風景

3 住居跡

挿図 5

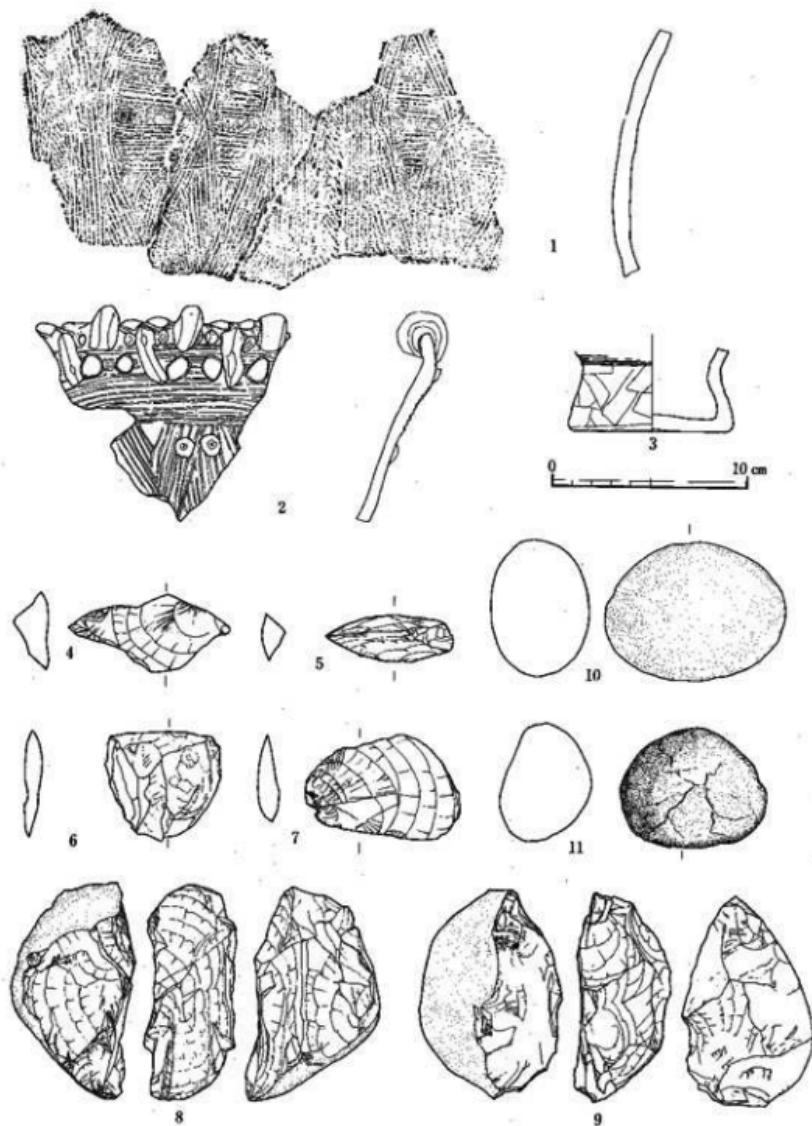
縄文時代の住居と古墳時代の第1号住居

- a層 寶褐色土層
- b層 黄褐色土層 (FP、C鉱石を含む)
- c層 寶褐色土層 (砂質、FP、C鉱石を含む)
- d層 黒褐色土層 (FP、C鉱石を含む)
- e層 黄褐色土層 (やや砂っぽいローム質、燒土塊を含む)
- f層 黑褐色土層 (FP、C鉱石を含む)
- g層 黄褐色土層 (FP、C鉱石を含み、ロームブロックが断続的層状に並ぶ)
- h層 燃土ブロック
- i層 黄褐色土層 (FP、C鉱石、焼土ブロックを含む)
- j層 黑褐色土層 (FP、C鉱石を含み、砂質ロームと互層になってややしまっている)



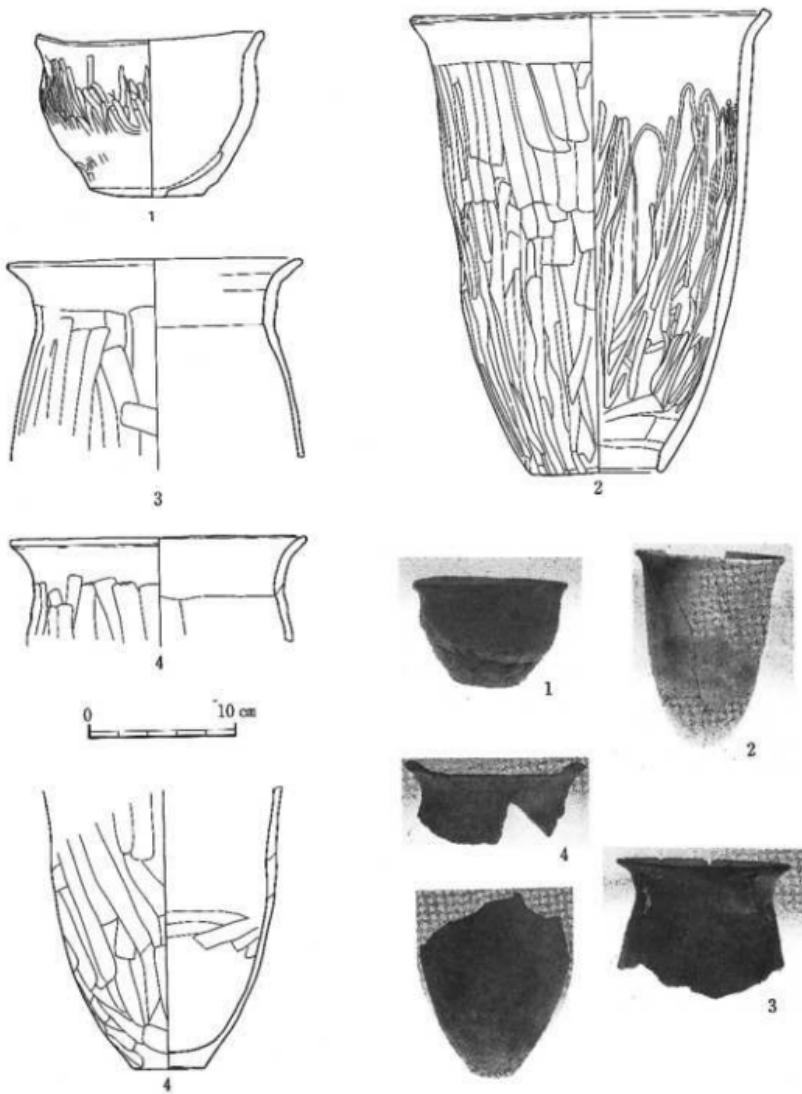
- 1層 黑褐色土層 (FP、C鉱石を含む)
- 2層 黄褐色土層 (C鉱石を含む)
- 3層 黄褐色土層 (細粒土で浮遊質を含まない)
- 4層 河岸砂堆積層
- 5層 黄褐色土層 (FP、C鉱石を多量に含む)
- 6層 黑褐色土層 (多量のC鉱石と若干のFP、燒土块、炭化物を含む)
- 7層 黄褐色土層 (粘性があり固くしまっている層)
- 8層 黄褐色土層 (FP、C鉱石を含む)
- 9層 黄褐色土層 (10層よりも質味が強い)
- 10層 黄褐色土層
- 11層 黄褐色土層 (8層と10層の互層で不均一な層、燒土块を含む)
- 12層 河岸土層(細粒土で砂質)
- 13層 黄褐色土層 (10層よりも質味が強いやや粘性のある固くしまった層)
- 14層 黄褐色土層 (若干のFPとC鉱石を含む)
- 15層 黄褐色土層 (ローム質)
- 16層 黄褐色土層 (14層よりもFP、C鉱石を多く含むやや質味をおびた層)
- 17層 黄褐色土層 (バサバサしている)
- 18層 黄褐色土層 (やや薄い)
- 19層 黄褐色土層 (やや粘性があり炭化物を含む)

C区丘陵は河川の浸蝕により2段の段丘が形成されており中程にテラス状の平坦部がある。この平坦部に縄文時代の住居と古墳時代の第1号住居が重複して検出された。縄文住居は北壁を第1号住居とピット5に、東壁をピット6に掘り込まれていて、南、西壁がかろうじて残り、形としては隅丸の方形が想定できた。壁高は約25cm、西壁で約30cm。住居中央付近と思われるあたりに深鉢型土器の胴部破片を差し込んだ圓い炉があり、住居西隅に深さ約22cmのピットを検出した。西壁付近に炭化物が集中しており火災住居と思われる。第1号住居は北、東壁を風割木跡で搅乱されており住居の規模等は不詳だが、東壁南寄りにカマドを検出した。このカマドの前あたりに遺物は集中して出土した。床面は固くしまっており、住居東側にいくつかピットが検出されたが、この住居に直接関係あるものかどうかは不明である。



縄文時代の住居から出土した遺物実測図

挿図 6



図版1 第1号住居出土遺物

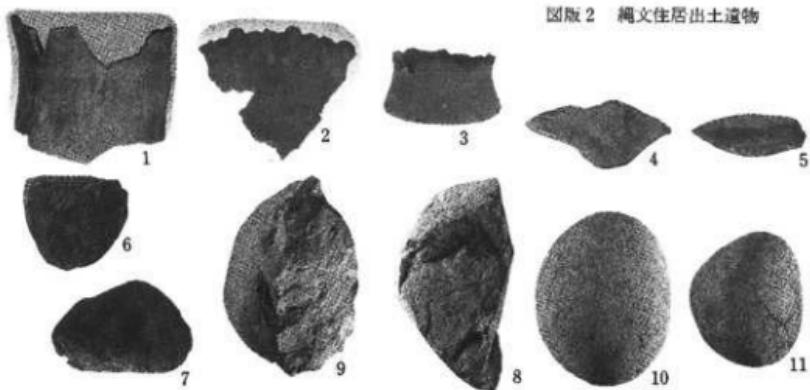
縄文時代の　からの出土遺物 (挿図 6、図版 2)

1は半截竹管による平行沈線で縦走、横走、斜行、曲線文を器面全体に描いているもので、深鉢の胴部の破片である。炉の囲いに転用していたが、接合復元後は約半周分にしかならなかった。2は半截竹管による平行沈線で縦走、横走、斜行を器面全体に施し（口縁部内側にも斜行の平行沈線を施している）、その上に耳たぶ状、ボタン状の貼り付け文を付け、更に棒状工具で刺突を施している。3は鉢型土器の底部で、底部は削り、体部はミガキ、平行沈線彫文。4、5、6、7は頁岩。8、9、10、11は安山岩で、11は火を受けて亀裂が入っている。

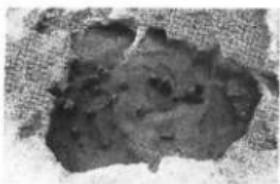
第1号住居出土遺物一覧表

番号	器種	法量 (cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	土師器 小型甌	口径 15.2 器高 11 底径 8	口縁部横ナデ、胴部上半部縦方向 粗いミガキ、胴部下半部ヘラ削り、 内面ナデ。下半部はもろく表面剥 離	乳白粒。石 英。小石等 含有	色調茶褐色。全体が黒つ ぼく火を受けた痕跡。ほ ぼ完形。焼成普通
2	土師器 瓶	口径 24.1 器高 31 底径 4.6	口縁部横ナデ、胴部上半部縦方向 ハケ目に近い感じのナデ、下刃縦 方向ミガキ、内面端文彫文	石英、黑色。 乳白色微粒 小石等含有	色調茶褐色。外面下刃～ 6%に斜に赤褐色を帯びる 残90%。焼成良好
3	土師器 甌	口径 20	口縁部横ナデ、胴部上半部縦方向へ ラ削り、内面ナデ	乳白粒。石 英。小石等 多量に含有	色調うす汚れた淡褐色部 分的に黒。口縁部は完形 上半部のみ。焼成普通
4	土師器 甌	口径 20 底径 5	口縁部横ナデ外側ヘラ削り。(縦斜 方向) 内面ヘラナデ	小石、砂粒 等多量に含 有	色調淡褐色(内面)。うす 汚れたうす茶色(外面) 口縁部半分、底部完形、 焼成普通

図版 2 縄文住居出土遺物

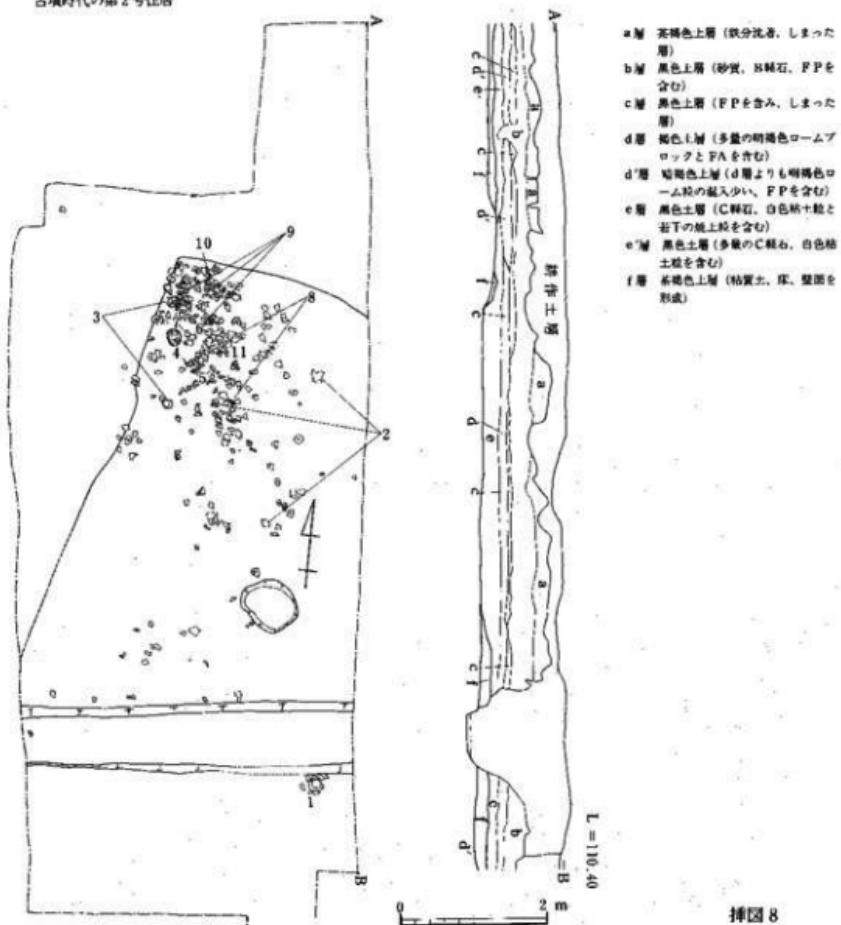


図版 3 遺構全景



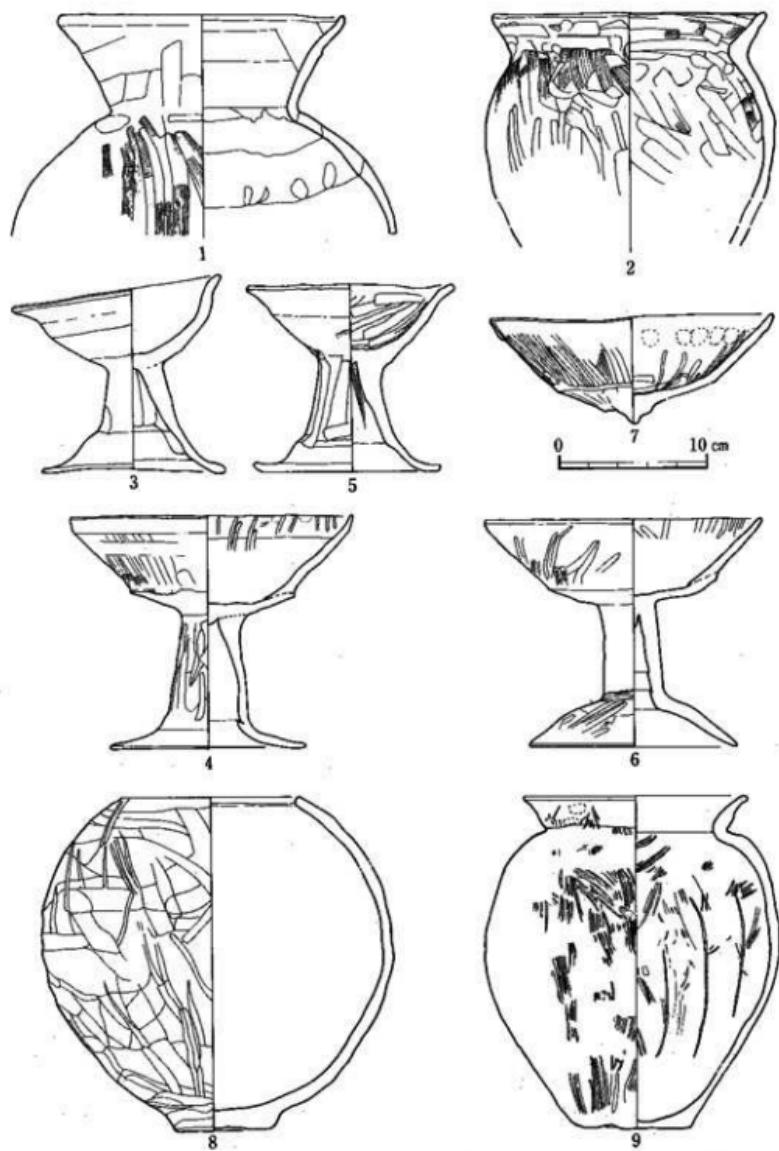
遺物出土状態

古墳時代の第2号住居



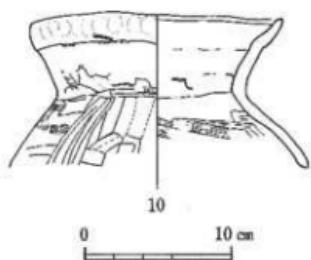
挿図8

D区は北隅を除いては段丘下の氾濫原低地に位置し、50cm前後の現耕作土層の下は浅間系軽石と二ヶ岳系軽石を含む黒色土の水平堆積が見られる。住居はこうした黒色土とその下層の粘質黒茶色土を掘り抜いて構築されていた。西壁走向は磁北から東に15°で引き続ぎ北壁は確認できたが溝状遺構8を越えた南壁ははっきりしなかった。調査範囲の関係で全掘できなかったが炉を検出し、住居北西隅から高坏（16個体分）、甕（7個体分）、壺（8個体分）が多く投棄された様な状態で出土した。他に炉の南側から小型甕を出土したが、坏はなかった。D区では他にも本住居遺構面でもある粘質黒茶色土上に遺物が出土しており（トレンチ9、20拡張区）その時期もほぼ同じであるので本住居以外にもこの時期の遺構の存在を推測させた。

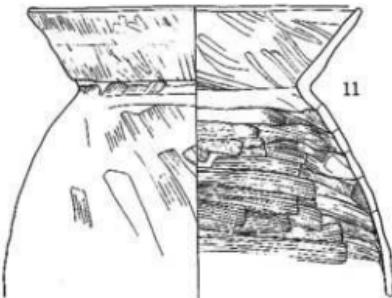


遺物実測図

插圖 9

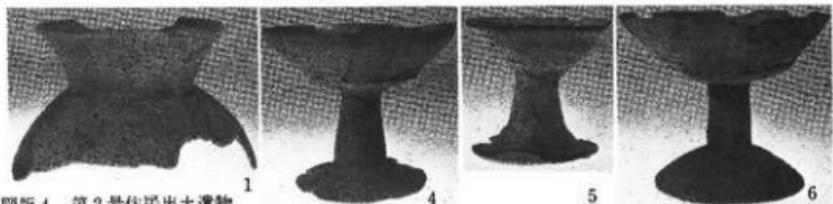


図版 10

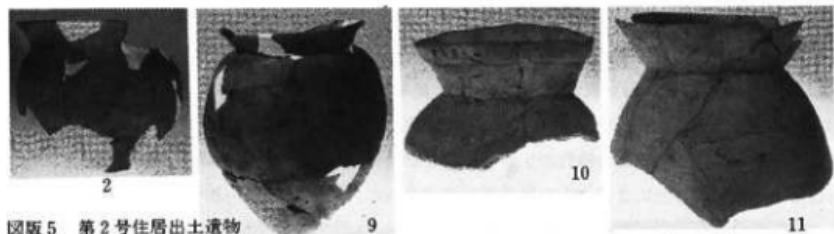


第2号住居出土遺物一覧表

番号	器種	法量(cm)	技 法 等	胎 土	備 考
1	土師器 壺	口径 19	口縁部横ナデ、肩部へラ削り。肩部にうすいハケ日、内面未調整	小石等多量に含有	色調淡褐色、口縁部はほぼ完形、上半部のみ、焼成普通
2	土師器 壺	口径 18.4	口縁部横ナデ(へラ状工具)、肩部にハケ目、内面粗いへラナデ。	小石、砂粒等含有	色調淡赤褐色、全体に厚めで雜な感じ、残30%、焼成普通
3	土師器 高壺	口径 14 器高 13.3 脚径 12.3	环部は内面底部を除き横ナデ脚部横ナデ、体部へラナデ。内側は粗いへラナデ、へそはめ込み式	小石、砂粒等少量含有	色調淡褐色、全体に厚めで雜な感じ、环部口縁部一部を欠く残80%、焼成普通
4	土師器 高壺	口径 19 器高 15.7 脚径 13.2	环口縁部横ナデ。环底部に体部接合、木口状工具による接合痕。脚部横ナデ。体部へラミガキ内側は粗いへラナデ、へそはめ込み式	小石、石英、辰石粒含有	色調赤褐色、环部内面は間隔が5mm~2cmで暗文施文。内面底部表面剥離。ほぼ完形、焼成良好
5	土師器 高壺	口径 13.8 器高 12.3 脚径 12.7	环口縁部横ナデ。内面へラナデ、脚部横ナデ、体部へラナデ。内側は粗いへラナデ、へそはめ込み式	小石、砂粒等含有	色調淡褐色、全体に厚めで雜な感じ、脚部一部を欠く残90%、焼成普通
6	土師器 高壺	口径 18 器高 15.3 脚径 13.5	环口縁部横ナデ、脚部横ナデの他はへラナデ、脚部は積み上げ。脚部は内面へそはめ込み式	石英、小石、砂粒等含有	色調淡褐色、环部内外面暗文施文。ほぼ完形、焼成良好
7	土師器 高壺	口径 19	环口縁部横ナデ。环底部と体部接合部横ナデ、外側に粗いへラミガキ、へそはめ込み式	小石、砂粒等含有	色調茶褐色、环部内面暗文施文、环部のみほぼ完形、焼成良好
8	土師器 壺	胫部径 11.6 胫部径 23.7 底径 6.8	胫部横ナデ、胫部へラナデ、部分的にへラミガキ有り。造り出し底部。	石英、砂粒等含有	色調上部茶褐色、下部黒味を帯びた茶褐色。口縁部を欠く、残80%、焼成良好。
9	土師器 壺	口径 15 器高 22.3 底径 7.6	口縁部横ナデ、胫部粗いへラ削り後ハケ目、全体に厚く表面凸凹	小石、砂粒等含有	色調淡褐色、口縁部外反、残70%、焼成良好
10	土師器 壺	口径 15.5~17 胫部径 11~12	粘土縫を巻き付け押圧、折り返し口縁。口縁部横ナデ、胫部へラ削りハケ目の部分有り。(内面にも)	小石、石英等含有	色調淡褐色、外面半分赤褐色、口縁部完形、上半部のみ、焼成普通
11	土師器 壺	口径 22 胫部径 15.2	口縁部横ナデ後外面横方向、内面横、斜方向ハケ目施文。胫上半部外側方向、内面横方向ハケ目施文、輪積み技法	乳白色、黑色颗粒、小石砂粒等含有	色調外面白っぽい淡褐色、内面黒灰色、上半部のみ、焼成良好



図版 4 第2号住居出土遺物

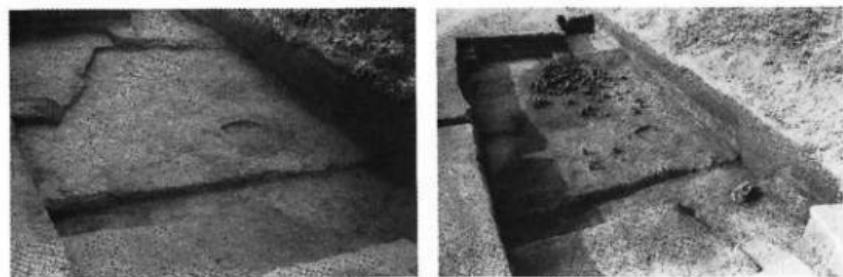


图版 5 第 2 号住居出土遗物

9

10

11



图版 6 遗构全景

遗物出土状态

4 周 溝 墓

1号周溝墓

插图 11



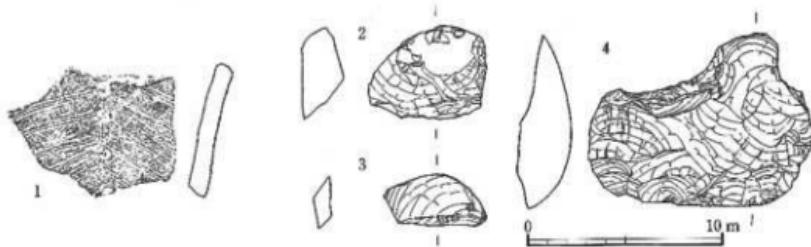
芳賀地区での発掘調査においては今までに弥生時代に属すると思われる遺構はほとんど確認されておらず、僅かに芳賀西部工業団地遺跡にこの時期のピット1と31基確認された古墳（ほとんどが円墳）のうちいくつかが円形周溝墓ではないかと見られている程度であるが、同じ赤城山南麓台地上の南橋地区では荒屋敷、西田之口遺跡において弥生時代の遺構の存在が確認されており、台地縁辺部（大正用水以南）にはこの時代の生活の痕跡が認められていた。今回の調査でも「西川」に浸食され形成された段丘上に2基の方形周溝墓が確認された。耕作土が薄く、相当削られており、主体部



図版7 遺構全景



周溝埋土状態（白っぽいのがC鞋石）

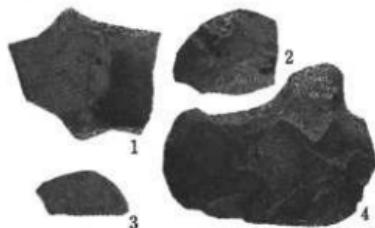


挿図12

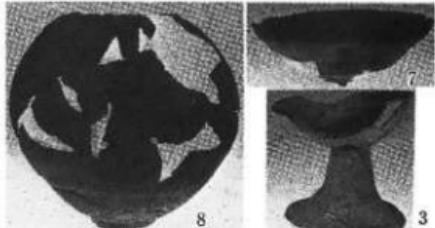
1号周溝墓出土遺物実測図

周溝墓からの出土遺物（挿図12、13、図版8左）

1は縦に深い沈線を垂下させ区画した後、この区画間に櫛齒状工具による浅い斜行線を充填し、更に円形竹管による刺突を垂下させた深い沈線上に施している。2、3、4及び2号周溝墓からの出土遺物（挿図13）はいづれも頁岩。



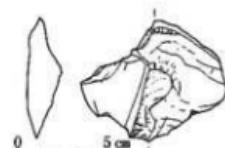
図版8 1号周溝墓出土遺物



第2号住居出土遺物

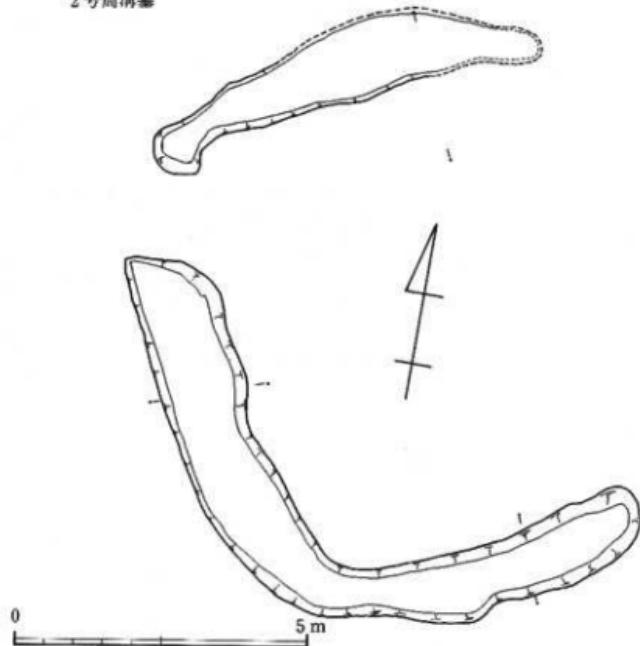
は1、2号周溝墓共に未検出であったが、周溝覆土中に周溝底部より2層の間層をおいてC軽石純層が厚さ10cm～15cm程堆積していた。

1号周溝墓は耕作、削平のためやや形が崩れているが東西約12m、南北約10mと東西にやや長い長方形を呈し、2号周溝墓は南北約10mで1号周溝墓よりもやや小さく東側周溝はなく、北西コーナーも渡り状に掘り残されていた。



挿図 13

2号周溝墓



挿図 14



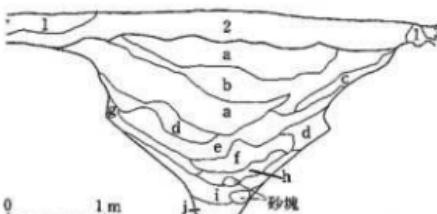
図版 9 遺構全景



作業風景

5 環濠

A区西端に西辺が、A区西から3分の2程の所に東辺が確認され、事情の許す限り追うこととした。その結果東辺は確認された所から約30m南へ行った所で西へ斜め(120°)に折れてB区南端に続いた。東辺、西辺はそれぞれ磁北に対し西に13.5°、11°振れており東西約85mを隔ててほぼ平行であった。掘り方は薬研掘りでかなりきっちつとした掘り方をしており、地層断面1で上巾約3.5m、下巾45cm。西辺で上巾約4.8m、下巾25cm。それぞれこの台地を形成する水性堆積の灰褐色ローム層(上部ローム期)を1.8m掘り込んで造られていた。南辺は地形の関係でやや小さく(上巾約2m、下巾40cm)、平面形としては西にかなり開いた台形状を呈し、B区南端部で立ち上りを確認、渡りが南辺にあったことが判った。埋土は一気に埋め戻された様な感じで出土遺物はなく時期の確定は出来なかった。



挿図 15 環濠地層断面-1

図版 10 環濠南東コーナー 1 (東から)
1 (南から)



- 1層 細粒土層(砂質、ローム粒の混入が目立つ)
- 2層 耕作土層(砂質、ローム粒を含む)
- a層 黒褐色土層(ローム粒、ロームブロックを主体とする黑色土との混土)
- b層 黑褐色土層(ローム粒、ロームブロックを含む)
- c層 黑色土層(ローム粒、ロームブロックを含む)
- d層 黑灰色土層(ローム粒、ロームブロックと砂質の黑色土との混土)
- e層 黑褐色土層(大きなロームブロック、砂塊が混入する)
- f層 黑色土層(砂質、下部と面干のロームブロックを含む)
- g層 黑褐色土層(ローム粒、ロームブロック、砂塊を含む)
- h層 黑褐色土層(ローム粒、ロームブロック、砂塊を主体とする黑色土との混土)
- i層 黑褐色土層(砂塊を含む砂層)
- j層 黑褐色土層(小さな砂塊を含むやや円れた砂層)



図版 11 環濠地層断面-1



環濠南辺立ち上り部分(細い掘り込みはW-1)

6 石敷遺構 (地域内土括を含む)

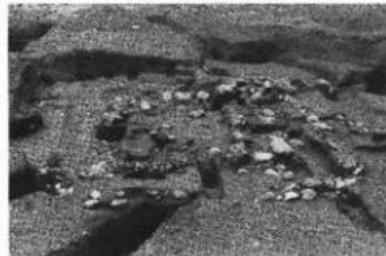
B区北隅に方形に区画された石敷遺構 2つと石列の一部を検出した。北から石敷遺構 1、2、3とした。1は南側が2の構築時に切られており、現状では南が開いた「コ」の字型の一重の石列で囲まれている。北、西側の石列の掘り方は上巾は共に1.2mで深さも20~25cm程で、東側の石列は南に向ってやや狭くなっているが構築時には同じ位の巾はあったと推定される。規模は東西約4.5m、南北は現状で約6m。石は安山岩系の河原石である。石列内側の浮いた転石を除去したところ掘り込みや据えた様な石は検出されなかった。石列の石の間から涙美系の陶器の破片を出土した。2は外周の石列がややぶれているが三重の石列で囲まれていて中間の石列の掘り方は他よりも深く(約80cm)、巾も75cm~120cmと広く、全周している。外、内周はやや浅く、巾も40~60cm程で南側を欠いている(外周は後世の耕作により壊されたものであるが、内周は明らかに掘り込みが切れている)。規模は外周東西が約8.7m、南北が約7.6m。石は安山岩系の河原石で外周の石列にはその中心線に大振りの角閃石安山岩を据えてその回りに拳大以上の河原石を添えていた。内周石列の内側の浮いた転石を除去したところ掘り込みはなかったが、上に平面を向けてローム面にしっかりと据えた石が6個検出された。やや歪んでいるが1間約1mの1間2間の長方形で石列ともほぼ平行して並んでいた。石列から古銭と常滑系の陶器の破片が出土した。石敷遺構 2の内周石列と中間石列の北西コーナーに90×80×深さ45cmの不整形の土括が検出され覆土から小振りの刀の大切羽、目貫、目釘、古銭が、周辺からは柄巻の留め金具が出土した。また土括の上から北西にかけて広がる範囲に多量の鉄製角釘と瓦のような鉄製品が出土した。



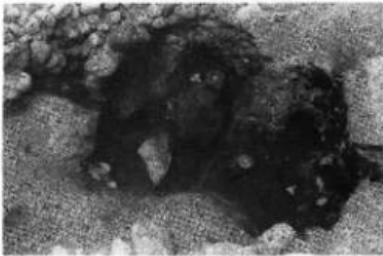
石敷遺構全景（南から）



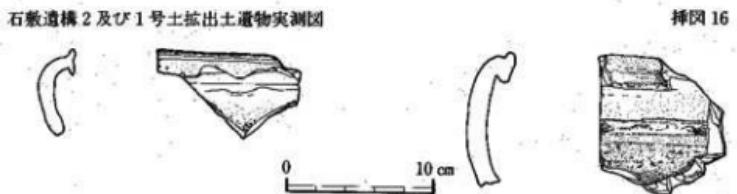
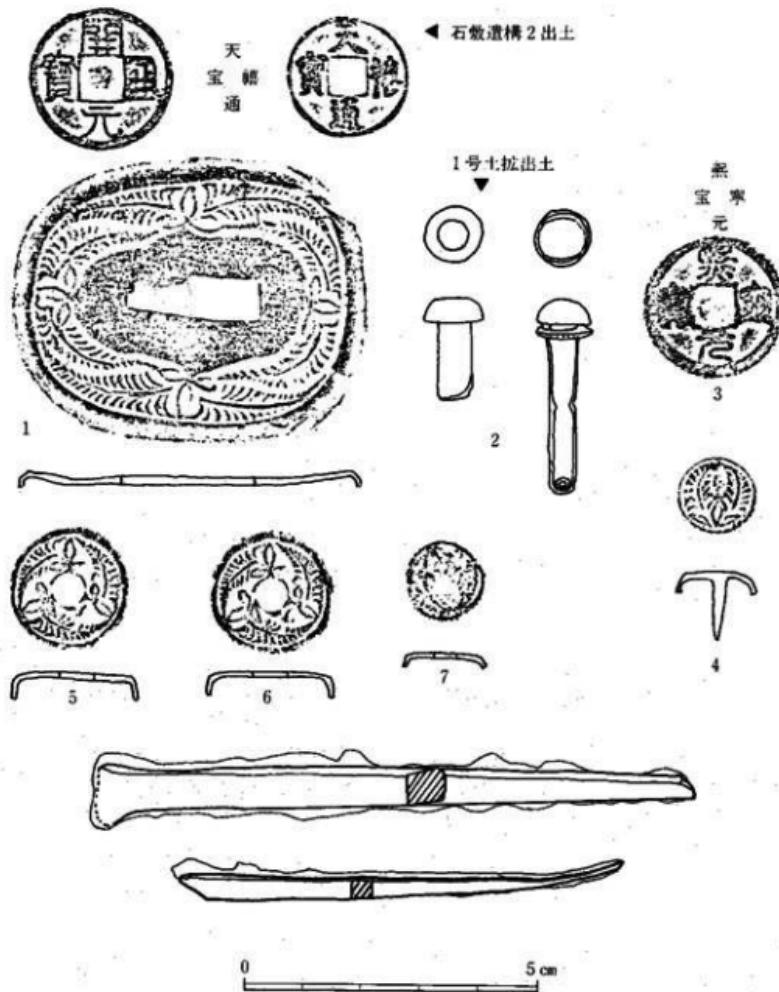
石敷遺構全景（北から）



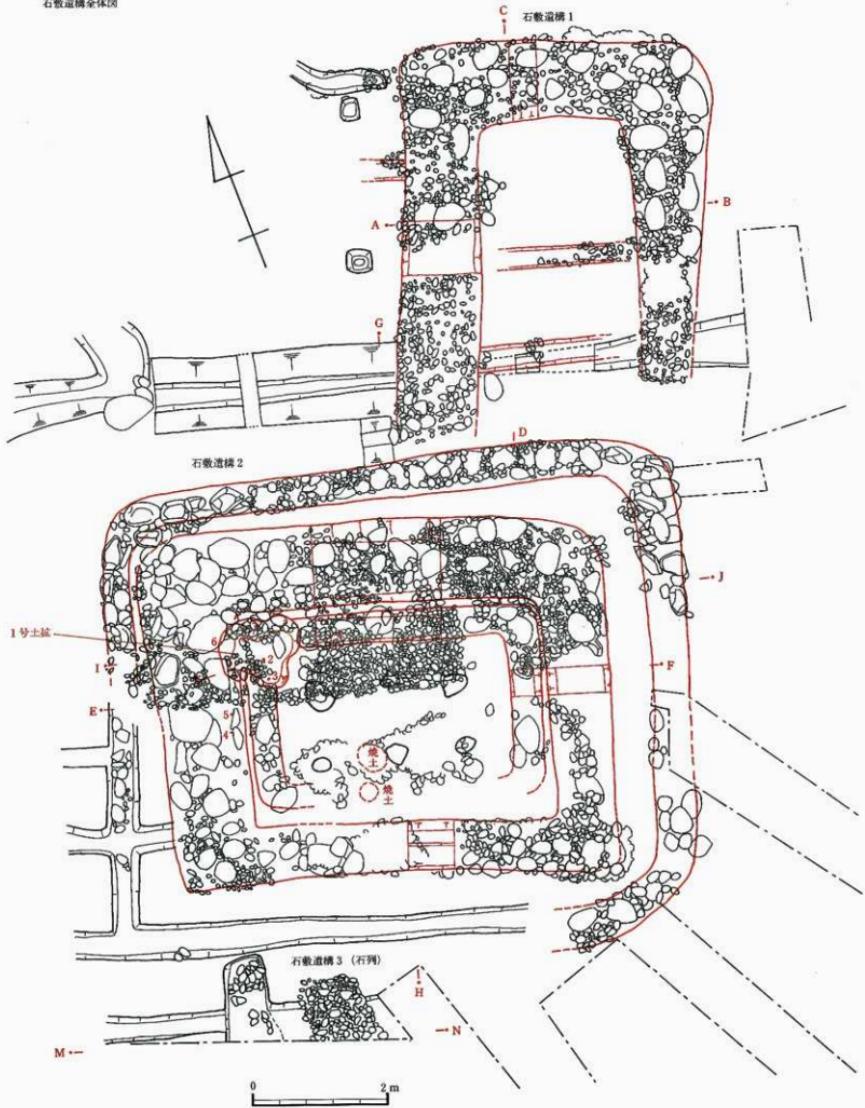
石敷遺構2全景（南から）



1号土括遺物出土状態

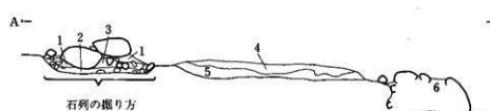


石敷道構全体図



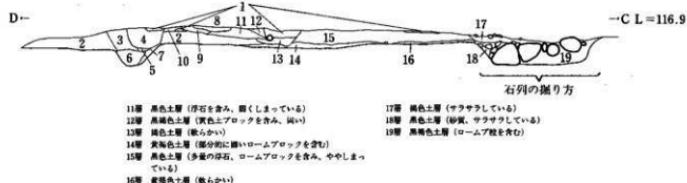
石造地盤断面図
及び基礎下断面図
(含 1号上地盤断面図)

石造造構1東西地層断面



- 1層 黒色土層 (サササラしている)
- 2層 実褐色土層
- 3層 黑色土層 (大山火薬粒子を含む)
- 4層 黑色土層 (砂質、ロームブロックを含む)
- 5層 黑色土層 (灰岩、ロームブロック、大山火薬粒子を含む)
- 6層 黑色土層 (砂質、サササラしている)

南北地層断面

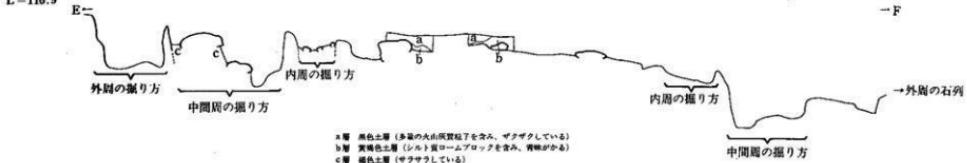


- 1層 黒色土層 (やや砂っぽいシルト質ロームのくだけもの)
- 2層 黒色土層 (若干の粘土を含む、固くしまっている)
- 3層 実褐色土層 (ローム質、ロームブロックを含みやや軟らかい)
- 4層 黒色土層 (砂質、シルト質ロームブロックを含む)
- 5層 黒色土層 (砂質、砂礫を含む)
- 6層 黑色土層 (砂質、砂礫的ロームブロックを含む)
- 7層 黑色土層 (軟らかい)
- 8層 黑色土層 (シルト質ロームブロックを含む)
- 9層 黑色土層 (ロームブロックを含む)
- 10層 黑色土層 (軟らかい)
- 11層 黒色土層 (砂質を含み、固くしまっている)
- 12層 黑色土層 (砂質を含む、固い)
- 13層 黑色土層 (軟らかい)
- 14層 黑色泥炭土層 (部分的に弱いロームブロックを含む)
- 15層 黑色土層 (多量の砂岩、ロームブロックを含む、ややしまっている)
- 16層 黑色土層 (軟らかい)

石列の振り方

石造造構2東西地層断面

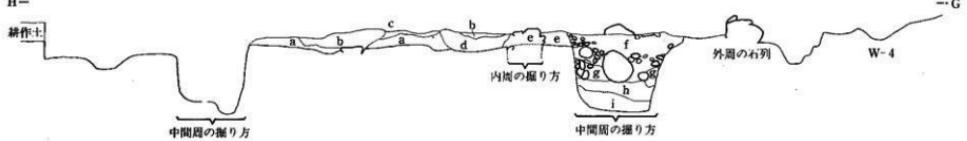
L=116.9



- a層 黑色土層 (タ茎の大山火薬粒子を含み、サササラしている)
- b層 実褐色土層 (シルト質ロームブロックを含み、砂礫がかる)
- c層 黑色土層 (サササラしている)

L=116.9

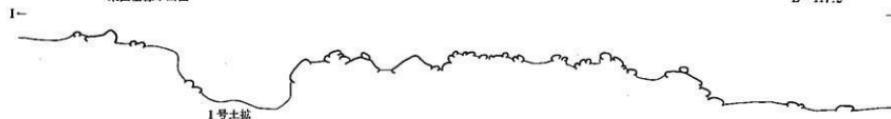
南北地層断面



- a層 内周色土層 (シルト質ロームブロックを含む)
- b層 黑色土層 (大山火薬粒子、若干の碎石を含む)
- c層 黑色土層 (炭化物、軟木栓、碎石を含む)
- d層 白色土層 (砂質、シルト質ロームブロックを含む)
- e層 黑褐色土層 (若干のロームブロックを含み、軟らかい)
- f層 実褐色土層 (砂岩、サササラしている)
- g層 実褐色土層 (ロームを含む、サササラしている)
- h層 黑褐色土層 (多量のローム質、ロームブロックを含み、固くしまっている)
- i層 黄色土層 (シルト質ロームブロックを含み、青白い)



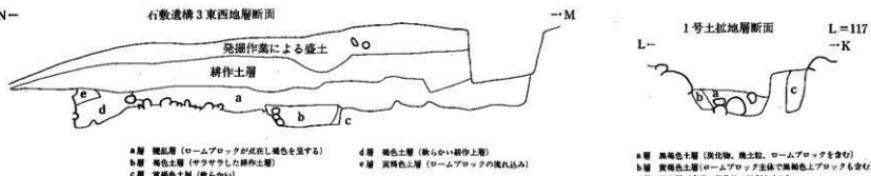
東西基線下断面



L=117.4

N-

石造造構3東西地層断面

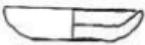


- a層 磨耗層 (ロームブロックが成長し褐色を呈する)
- b層 黑色土層 (サササラした操作土層)
- c層 黑褐色土層 (軟らかい)
- d層 黑色土層 (軟らかい)
- e層 黄褐色土層 (ロームブロックの流れ込み)

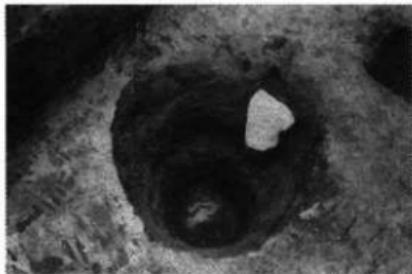
7 その他の遺構

(1) ピット（墓拡を含む）

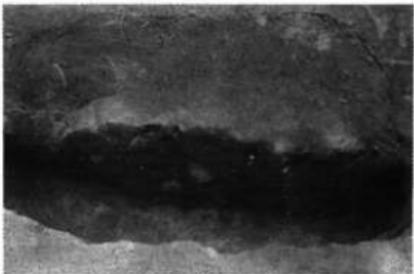
縄文時代のピット1、覆土中に多量のC軽石が堆積していたピット1、他にピットとして処理したものは32あったが、その後墓拡と認定したり風割木跡であったり柱穴群としてまとめたものなどあつたりして最終的にピットの数は5であった。ピットから遺物の検出されたものとしてはNo.4、5から縄文土器片が流れ込みで、6から墨曜石が、33からは底部回転系切り後調整の厚ぼったいカワラケと渥美系陶器の大甕破片があった。時期は13C頃か。縄文ピットからは出土遺物はなかった。墓拡は1.5m×1.25m×深さ35cmの隅丸方形で、覆土中に多量の骨片を含む層があり、それと認めた。



図版 20
ピット 33 出土遺物



図版 13 ピット-33 摂り方



墓拡地層断面

(2) 溝状遺構

B区に5条、D区に3条、計8条の溝状遺構を検出した。No.4は石敷遺構2の北、西側を囲む様な形であったが南側には回らず西へ向っており、石敷遺構2の北側を東に走る部分も石敷遺構1の石列の下にもぐり込んでおり石敷遺構1に先行していた。石敷遺構2は石敷遺構1の南側に伸びる石列を切って構築しているので、石敷遺構2とは直接の関係はない様である。No.8はトレンチ20拡張区を南西から北東へかけて斜めに走り、上巾80cm～1m程で河床から厚さ約20cmのC軽石純層を堆積していた。

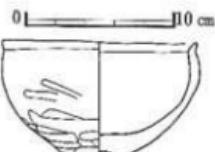
(3) トレンチ9、20拡張区

D区最南端に設定したトレンチ9は現地表面下1.4m程の枯質黒茶色土層上に炭化物、石器、土器（土師窯底部、壺）が検出され、拡張区の中央を南北に伸びる舌状の河原石堆積が見られた。この

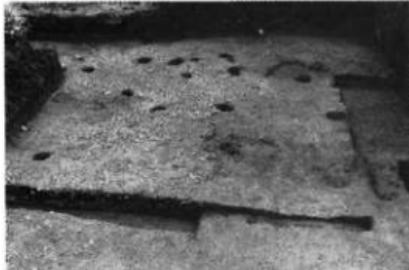


図版 14 溝状遺構-2、3(B区)

河原石の堆積は西側地断に砂の堆積層が若干検出されたことなどからある時期水が流れで堆積したものかとも思われたがこの河原石堆積の西側の土器、炭化物の散布範囲は西側地断からも、平面的にも住居として認定するまでには至らなかった。トレンチ20拡張区も同様で現地表面下1.1m程の粘質黒茶色土層上に土器片を散布していたが、住居などの遺構に認定できなかった。



挿図 21
トレンチ 9 拡張区出土遺物



図版 15 トレンチ 9 拡張全景



トレンチ 20 拡張区全景

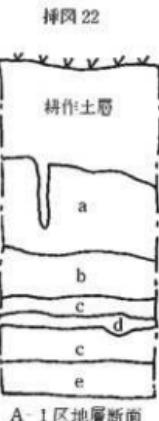
(4) A-1 区（氾濫原低地）

本遺跡地東側を南下流する通称「西川」は、端氣の集落の西側にあたり、赤城山から下流する大きな流れによる水性地積のローム層（上部ローム期）の台地を開析し、比高5mの谷を形成した。そこに黒色土が厚く(1.5m以上)堆積し、更にその上にB軽石純層が表土から70cm~90cmのところに堆積していた。範囲は段丘下から17m程離れた河原石の堆積が切れるあたりから始まり21.5m程行ったところで堆積が終っている。厚さは約20cmで粘性を帯びた黒色土を覆っている。B軽石層を取り除いた後は僅かに南北に段差が走り、黒色土層下部が鉄分沈着のためと思われる赤褐色を帯びていたこと、B軽石堆積始点あたりの河原石に大きなものや石列らしきものがあったことなどから水田址を想定し、花粉分析を行った。(次章の報告を参照のこと)

- a層 赤褐色土層(鉄分沈着、しまった層)
- b層 黒色土層(砂質、FPを含む)
- c層 B軽石純層(黒っぽい)
- d層 B軽石純層(黒、青、緑、あざき色に着色が認めできる)
- e層 B軽石に伴うあづさ色灰層
- f層 黒色粘質土層(FPを含む)



図版 16 A-1 区全景（西から）



(5) 花粉分析報告

1. 試料

分析試料は合計で5点であり、第1表はその内容である。

第1表 試料表

試料番号	土質	花粉・胞子化石産出傾向
No 1 (A-1区-1)	暗黒色粘質土	R
2 (A-1区-2-①)	赤褐色粘質土	R
3 (A-1区-2-②)	暗黒色粘質土	R
4 (C区トレンチ1)	〃	R
5 (C区トレンチ1)	〃	R

* R: Rare 少ない

2. 分析方法

試料秤量(10g) → HCl処理 → HF処理 → 重液分離 → アセトリシス処理 → KOH処理 → 封入

3. 分析結果

分析結果は、検出された花粉・胞子化石の総数を基数とする百分率で各試料における微化石の割合を算出し、表-1として後掲した。この中で産出割合の高い主要花粉・胞子化石についてはダイアグラムで表わし、図-1として同じく後掲した。(PLATE・1, 2)を作成したので参照されたい。今回の分析で検出された花粉胞子化石は下記のものである。

《AP-2 (広葉樹花粉)》

Alnus (ハンノキ属)、Fagus (ブナ属)、Lepidobalanus (コナラ亜属)、Moraceae (クワ科)

《NAP(草本花粉)》

Persicaria (サナエタデ属)、Chenopodiaceae (アカザ科)、Thalictrum (カラマツソウ属)、Artemisia (ヨモギ属)、Carduoideae (キク亜科)、Cichorioideae (タンポポ亜科)、Gramineae (イネ科)、Cyperaceae (カヤツリグサ科)

《FP(形態分類花粉)》

Trizonocolporate pollen (三溝孔型花粉)

《FS(羊齒類胞子)》

Polypodiaceae (ウラボシ科)、Monolete spore (単条溝型胞子)

《その他の微化石》

Pseudoschizaea

Botryococcus

次に各地区別に花粉・胞子構成の特徴を述べる。

[A-1区-1]

NO. 1

B軽石層を含む砂質土直下から得られた草炭質の試料であるが、花粉孢子化石は多くはなかつた。検出された花粉のうち、大部分が草本花粉のArtemisiaによって占められた。この他Carduoideae (4.8%), Gramineae (2.4%), Cichorioideae (1.6%)などの草本花粉やMonolete spore (3.6%), Polypodiaceae (1.2%)などの羊齒類胞子が検出された。

更に淡水生藻類の微化石であるPseudoschizaeaやBotryococcusなども検出された。

[A-1区-2]

NO. 2

B軽石層直下の暗黒色粘土質土であり、A-1区-1と同様にArtemisia花粉が75.0%検出され優占した。この他、Gramineae (2.5%), Cichorioideae (1.5%) 等の草本花粉、Monolete spore (13.5%), Polypodiaceae (1.5%) 等の羊齒類胞子が検出された。また、この試料からはLepidobalanus (3.0%), Moraceae (0.5%) 等の広葉樹類も僅かながら検出された。

NO. 3

この試料はNO. 2直下の試料であるが花粉・胞子化石は非常に少なかった。その状況写真をPLATE・2のNO. 11に示す。

[C区トレンチ1]

NO. 4

B軽石層直下の草炭質の黒色粘土であり、花粉・胞子構成は、これまでの試料と大差なく、Artemisia花粉が84.5%を占め優占する。この他Carduoideae (3.5%), Gramineae (2.5%), Thalictrum (1.5%) 等の草本類やMonolete spore (2.5%) 等の羊齒類、Pseudoschizaea等が低率ながら検出された。

NO. 5

NO. 4直下の試料であり、花粉・胞子構成はNO. 4と酷似した構成を示す。やはりArtemisia花粉が優占 (91.0%) し、Cichorioideae, Gramineae, Thalictrum等の草本やMonolete sporeがこれに随伴する。またPseudoschizaeaも13個体検出された。

4. 考察

以上、各地別に述べた構成から古植生について述べると、何れの試料もArtemisiaを優占とし、Gramineae, Carduoideae, Cichorioideae等の草本類を伴った草地の植生が推定される。この草地は、Pseudoschizaea, Batryococcus等の検出から比較的温潤であったと考えられる。

また樹木花粉が殆ど検出されなかったことから、近くにおいて樹木の生育していた可能性は薄く、荒地的な草地が擴がっていたものと考えられる。

最後に、今回の分析の目的であった水田耕作の可能性については、Gramineae花粉の産出が非常に少なかったので何とも判断し難いが、他の水田耕作の証拠のある地域における分析と比較すると、耕作に関連あるイネ科のものは耕作推定地では可なり多いことが例としてあるので今回のその資料からでは可能性は薄いものと考えられる。

表-1 端氣遺跡 花粉分析結果

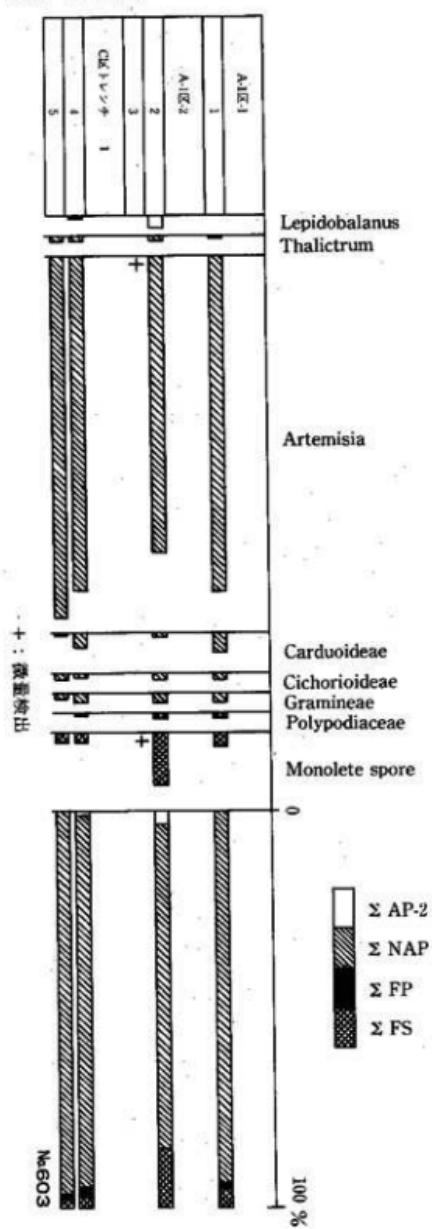
(No.603)

		Sample No.							
		A-1区-1	1	A-1区-2	2	3	C区トレンチ1	4	5
AP-2	Alnus								0.5
	Fagus								0.5
	Lepidobalanus				3.0				0.5
	Moraceae				0.5				
NAP	Persicaria								0.5
	Chenopodiaceae								0.5
	Thalicum		0.4		1.0			1.5	1.5
	Artemisia		84.8		75.0	2		84.5	91.0
	Carduoideae		4.8		1.0			3.5	0.5
	Cichorioideae		1.6		1.5			1.0	1.5
	Gramineae		2.4		2.5			2.5	1.5
	Cyperaceae				0.5				
FP	Trizonocolporate		1.2					2.0	1.0
FS	Polypodiaceae		1.2		1.5			0.5	
	Monolete spore		3.6		13.5	1		2.5	2.5
T O T A L	Σ AP-2		0.0		3.5	0		1.0	0.5
	Σ NAP		94.0		81.5	2		94.0	96.0
	Σ FP		1.2		0.0	0		2.0	1.0
	Σ FS		4.8		15.0	1		3.0	2.5
	Σ Pollen & Spores (N)		250		200	3		200	200
	Pseudoschizaea		27		9	1		21	13
	Botryococcus		1						

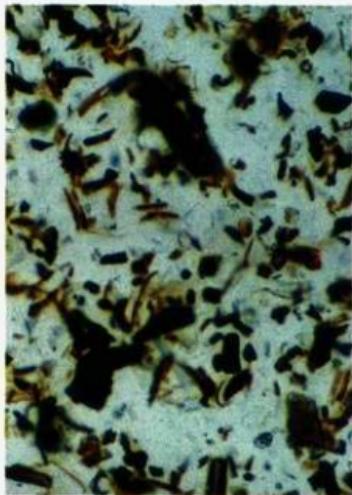
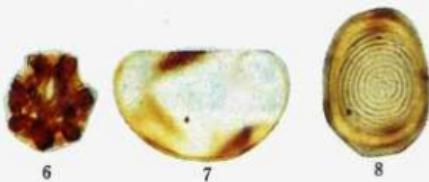
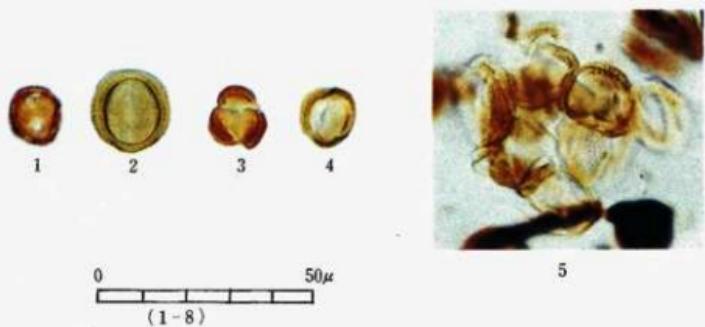
単位 ; %

3 : 検出個体数

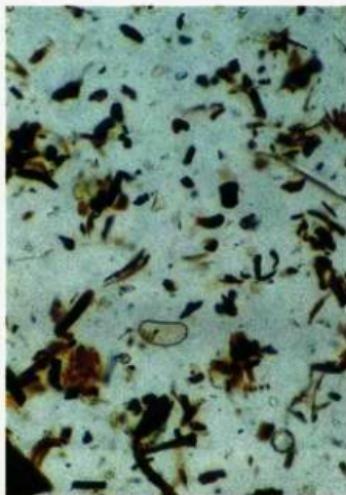
図-1 墓地遺跡 花粉ダイアグラム



図版 17 (花粉カラー写真) Plate 1



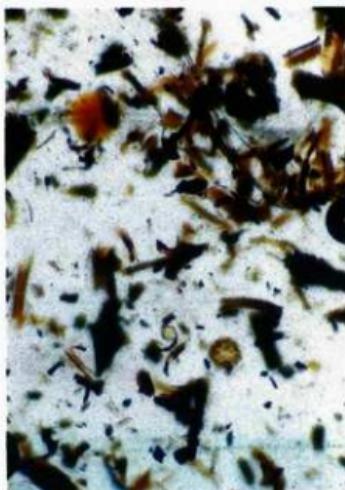
9



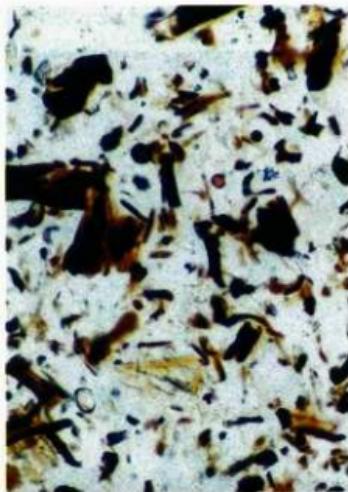
10



11
0 50μ
(9-13)



12



13

Explanation of Plates		
Photo No	Sample No	Pollen and Spores
PLATE 1		
1	C区トレンチ 1	5 Thalictrum (カラマツソウ属)
2	"	4 Artemisia (ヨモギ属)
3	"	5 A.
4	A-1区-1	1 A.
5	C区トレンチ 1	4 A.
6	A-1区-1	1 Cichorioideae (タンポポ亜科)
7	C区トレンチ 1	5 Monolet spore (单条構型孢子)
8	A-1区-1	1 Pseudoschizaea
9	"	" 状況写真
10	A-1区-2	2 "
PLATE 2		
11	A-1区-2	3 状況写真
12	C区トレンチ 1	4 "
13	"	5 "

8 ま と め

昭和57年度の調査で以下のことが確かめられた。

- 縄文時代の竪穴住居1軒を検出した。住居中央付近と思われるあたりに土器片を転用埋設した圓い炉があり、出土遺物から諸磯C期に位置するものと思われる。火災住居である。他にピット1を検出。出土遺物がないが、このピットの所在するA区では多量の縄文土器片を表面採集し、それがほとんど前期後半に集中しているのでピットもほぼこれと同時期のものと思われる。
- C軽石純層が覆土中に堆積する方形周溝墓2基とピット1、溝状遺構1を検出した。芳賀西部工業団地遺跡で確認された古墳群とは谷1つ隔てた位置にあり、今まで芳賀地区では弥生時代の遺構がほとんど確認されていなかっただけに、この時代のこのあたりの土地利用を考える上で貴重な資料となる。来年度の調査で更に北に発掘区が設定されるのでその成果が期待される。
- 和泉期のものと思われる竪穴住居1軒と鬼高III期のものと思われる竪穴住居1軒を検出。和泉期の住居は炉を、鬼高期の住居はカマドを持つ。和泉期の住居が検出された段丘下の粘質黒茶色土層上には他にも同じ時期の遺物が集中して出土した所があり、この時代の居住空間が段丘下の黒色土層上であった事が推測された。
- 本遺跡地舌状台地先端部分の丘陵は、調査前には古墳であると思われていた（関東平野の方からこの丘陵を見て丘陵の向う側の低地の小字名は「塚越」になっている）。抜根、表土排土の後、トレーナーを入れてみたところこの台地を形成している水性堆積の灰褐色ローム層（上部ローム期）が河川の浸蝕によりたまたま塚の様に削り残されたものであることが判明した。
- 石列で方形に区画した石敷遺構は当初古墓ではないかという事で調査を進めていたが、石列内側に主体部と思われる様な掘り込みがなく、石敷遺構2では土台石になる様な石がやや並んでいるが東西に1間南北に2間の長方形に検出され、むしろ建物跡（例えば御堂のようなもの）ではないかと推測された。土括はこの石敷遺構に後出し、後に協差（長さ1~2尺）と呼ばれる程度の長さの刀の鍔をおさえる大切羽、刀身が柄から抜けない様に差す目釘と目貫、柄巻の留め金具などを出土した。骨は出土しなかった。石敷遺構は出土した遺物から13~14世紀頃のものと思われ、土括もそれほど離れない時期のものかと思われた。
- 西に開く台形状の平面形を呈する環濠を確認した。今回調査では南側半周程になるか。南側に渡りを持ち、掘り方はきっちりとした薬研掘りであった。環濠内側も表土を排土し、柱穴状のものをいくつか検出したが遺構として認定するに至らなかった。石敷遺構との関連も不明で、環濠覆土からの出土遺物はなく時期は不明であった。来年度の調査で環濠全体がは掘されれば時期や石敷遺構との関連も判明するかもしれない。その成果に期待したい。
- B軽石純層に覆われた段丘下の黒色土湿地帯（A-1区）は花粉分析の結果では谷地水田である可能性はほとんどない事が判明した。

図版 19 遠構



A区遠景 (西から)



B区遠景 (南から)



A-1区 西側トレンチ



A-1区 東側トレンチ



C区遠景 (南から)



D区遠景 (北から)



E区南麓丘陵と関東平野 (北西から)



F区遠景 (南東から)

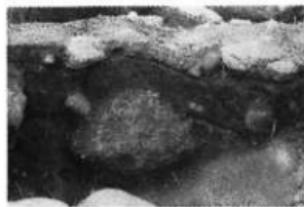
図版 20 遺構出土遺物



石敷遺構全景(東から)



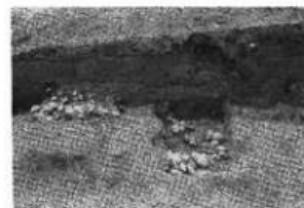
石敷遺構 2 北側石列



石敷遺構 2 中間石列掘り方地層断面



石敷遺構 1 北側石列掘り方地層断面



石敷遺構 3 塙土地層断面



縄文住居埋設土器出土状態

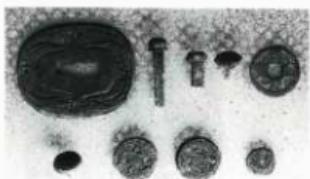


第2号住居北西隅遺物出土状態

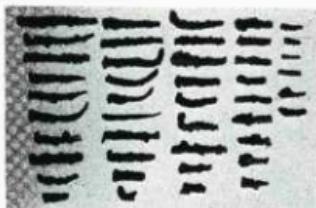


第2号住居No. 4 遺物出土状態

図版 21 出土遺物



1号土括出土遺物



1号土括付近出土鐵製角釘



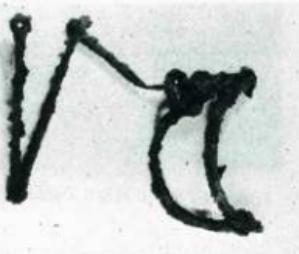
石敷遺構 2 出土古錢



表採古錢



石敷遺構 2 土常滑



1号土括付近出土鐵製品



端 気 遺 跡

昭和 58 年 3 月 31 日 印刷

昭和 58 年 3 月 31 日 発行

発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目 12-1

印刷 有限会社 原田印刷所
前橋市大手町三丁目 6-10

